

首都圏の都市成長前線帯における商業地域の形成

—飯能市の1880～1890年の変容をめぐって—

田村正夫

目次

1. 序
2. 研究対象地域
3. 商業地域の形成
 - (1) 概観
 - (2) 日用・食料品商の展開
 - ① 荒物類商 ② 菓子類商 ③ 穀類商 ④ 生鮮食品商
 - ⑤ 油類・茶・木炭・砂糖・豆腐各商
4. 結語

1. 序

人間生活は時間的な積み重ねによって行われるから、その意味で、社会は歴史的な所産である。しかし、時間的経過は、取りも直さず、変化する空間の積み重ねであり、現在の空間は、過去の空間の積み重ねの結果、生じたものと断ぜざるを得ない。しかも、現在の空間はもち論、どの時点の空間においても、中心と、中心を中心たらしめているところの外側、すなわち地方とがある。空間の積み重ねの経過において、その中心が移動することもあれば、全く移動しないこともある。移動させるような何らかの条件が起こった時に、中心が移動するのは当然であるが、空間そのものが変化しても、従来の中心を踏襲すること、すなわち、中心を移動させるような空間の変化がないこともある。時には、空間そのものは大きく変化しても、中心は、ますます、その中心性を強めることがある。

ところで、社会生活を空間の立場から検討した場合、中心たらしめている要因は何であろうか。元来、個々の人間が、物心両面において個々の条件に埋没してしまえば、人間社会の発展はみられない。いいかえれば、物心両面にわたる communication のひん度¹⁾が、人間社会の発展の差を招来する。とすれば、中心とは、communication の中心という意味に解される。そこで筆者は、communication のひん度をはかる物質的指標を、商業（流通）に求めたのである。

首都圏の都市成長前線帯には、都市化に伴う商業の展開が認められるが、1960年代以降の商業展開の基盤には、在来商業地域の性格が関与していたものとみられる。筆者は、先に首都圏の都市成長前線帯における商業地域形成のメカニズムを分析するために、埼玉県坂戸市及び毛呂山町における商店を対象とする聞き取り調査を行って、論述を試みた²⁾。次いで、首都圏の都市成長前線帯に組み込まれる以前の在来商業地域の性格を問題にし³⁾、繊維品商、特に織物商の取扱品目と経営規模を通じて、埼玉県における在来商業地域の性格を分析した⁴⁾。さらに、首都通勤圏北西境の外縁部にあたる埼玉県越生町における商業地域の形成を、主として1883～1902年の店舗の変容にあらわれた地域的特質を通じて、分析した⁵⁾。本論文では、飯能市における1880～1890年の店舗の変容を、同じく溪口集落である越生町の1883年の実態⁶⁾と対比しながら、分析する。

1884年の商業売上金高其他調書に記載される店舗について、1880～1890年の変容を明らかにするため、(1)1880年：旅籠屋泊客人員書上、(2)1881年：商業金高調、商金高調、(3)1885・1887・1890各年：商業売上金高調、(4)1887年：地方税起廃業届冊、(5)1890年：地方税営業人起廃届編冊、(6)1890年：商業売上金高其他調書を使用した。

商（業売上）金高調は、商業行司⁷⁾が、各店舗の年間売上額を翌年1月10日までに取りまとめて役場に報告したものであり、いわば各店舗の申告売上額とみなすことができる。すなわち、用紙は「制限ナシト雖モ可成大小不同ナラザル様⁸⁾」と規定され、「休業ニテ売上金ナキモ其業ハ必ず別記⁹⁾」し、「一月新規ノ分ハ其必要ナキモ二月以来新規ノ分ハ必ス本年何月新規¹⁰⁾」と記入された。さらに、質商・染物商・貸付・陸運・旅籠・安泊・売薬・製造・雇工・料理・飲食・湯屋・理髪・水車・漁業などの外、各別に出願した業務については、二重に記載しないこと、現金売りと掛け売りを合算しないで、その各の品目ごとに売上金を示すことになっており、業態については卸売り・仲買・小売りの別が明らかにされていて¹¹⁾、各店舗の動態を知る上に、好個の資料である。とはいえ、いわゆる過少申告の存在を否定できないが、それに関する資料を求めることは、きわめて困難である。しかし、土地所有の面から間接的に検討する余地があるため、この点について、後日、稿を改めて論じたい。

2. 研究対象地域

面積 134.06km²、人口57,584人（1978年3月）の飯能市は、東京駅を中心とする45km圏、所要時間90分圏に位置する（図1）。西部の秩父山地（最高点は北西の刈場坂峠879m）は、南及び東するにしたがって低下するが、総面積の約80%をしめる。残りは、東部の高麗・加治両丘陵、入間台地及び低地から成り、市街地は、入間川北岸の段丘上に位置する（図2・3）。

飯能市における1970～1973年の人口増加率は、5.1%であり、埼玉県内39市¹²⁾中の第34位¹³⁾で

あったが、1973～1976年には、さらに3.7%に低下した¹⁴⁾。しかし、1974年の人口当たり小売業販売額の水準値(全国=100)は97.2を示し、39市中第9位¹⁵⁾である。すなわち、人口増加率に比べて、小売商勢が強く、首都圏の都市成長前線帯における拠点的性格を示唆している。

飯能付近の領主黒田氏が、旧領主中山氏縁故の中山に対して新しい町場として飯能を設定したのは、1707～1715年と推定され¹⁶⁾、連担して市街を形成していた飯能・久下分・真能寺3村が合併して町制を施行したのは、1882年である。

溪口集落としての性格は、「村落構造にせよ、取引形態にせよ、或は住民の意識に至る迄(1)大都市江戸に近接している事、(2)里方は水田地帯に近接せず間に洪積台地の畑場がある事等によって規定されて来る。大都市江戸の存在は山方の生産物木材や炭の商品価値を大ならしめ、谷口集落の商人にも利潤をもたらすが、生産地帯自身の経済力も高くなり谷口集落商人の利益独占を許さなくなったのである。里方の生産物米穀においても大消費地江戸を控えて早くから商品化し、川越入間川扇町屋等には米穀問屋が軒を並べて飯能の米穀商は彼等と結んで商品ルートの一部をつとめて来たわけである。かかる事業によって谷口集落の機能は山方(名栗・吾野)谷口(飯能)里方(入間川、扇町屋)に三分された。又飯能商人は土地集積をして地主化する方向に進まず、商人として業積を広げ、他地域にも進出するという発展方向をとった。これが村落構造の面では江戸への出寄留増加、土地所有の僅少、通婚圏や雇用圏の広大となって表現されている¹⁸⁾」といわれる。

近世には、6・10の六斎市(飯能繩市)が立ち、商店街は、一筋の街村型を形成して発達した。1915年、西武池袋線飯能駅の開設によって、商店街が駅まで伸び、次いで1931年、国鉄八高線東飯能駅の開設は、同駅前通りの商店街を発達させた。さらに第2次大戦中、周囲の精明・元加治・加治・南高麗を合併した後、1954年に市制を施行し、その後、西部の原市場・東吾野・吾野を合併したため、市街が次第に拡大されたのである¹⁹⁾。

飯能村は、1820年ごろ、「川越城下より秩父へ通う道なり、又一条は南の八王子辺より秩父へ通ふの道なり、共に道幅二間許、ここには民家軒を並べて住し、市立ある所は東西へ三里許、その道幅も七間余あり、戸数すべて百三十六、陸田多く水田少し(中略)地形高低あり、前々より毎月六の日十の日市を立てり、その始は山あひの村民、繩篋を第一として売買し、或炭薪を出せしが、今は青梅縞・絹太織・米穀に至るまでを交易す²⁰⁾」という実状であった。その後1876年には、「地勢、西北に多峰主山を負ひ南に入間川を帯び沿岸は称平坦にして人家軒を並べ日用諸物

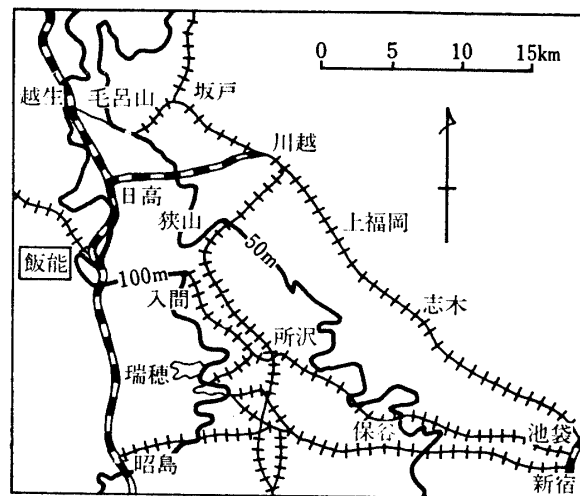


図1 飯能市の位置と高度

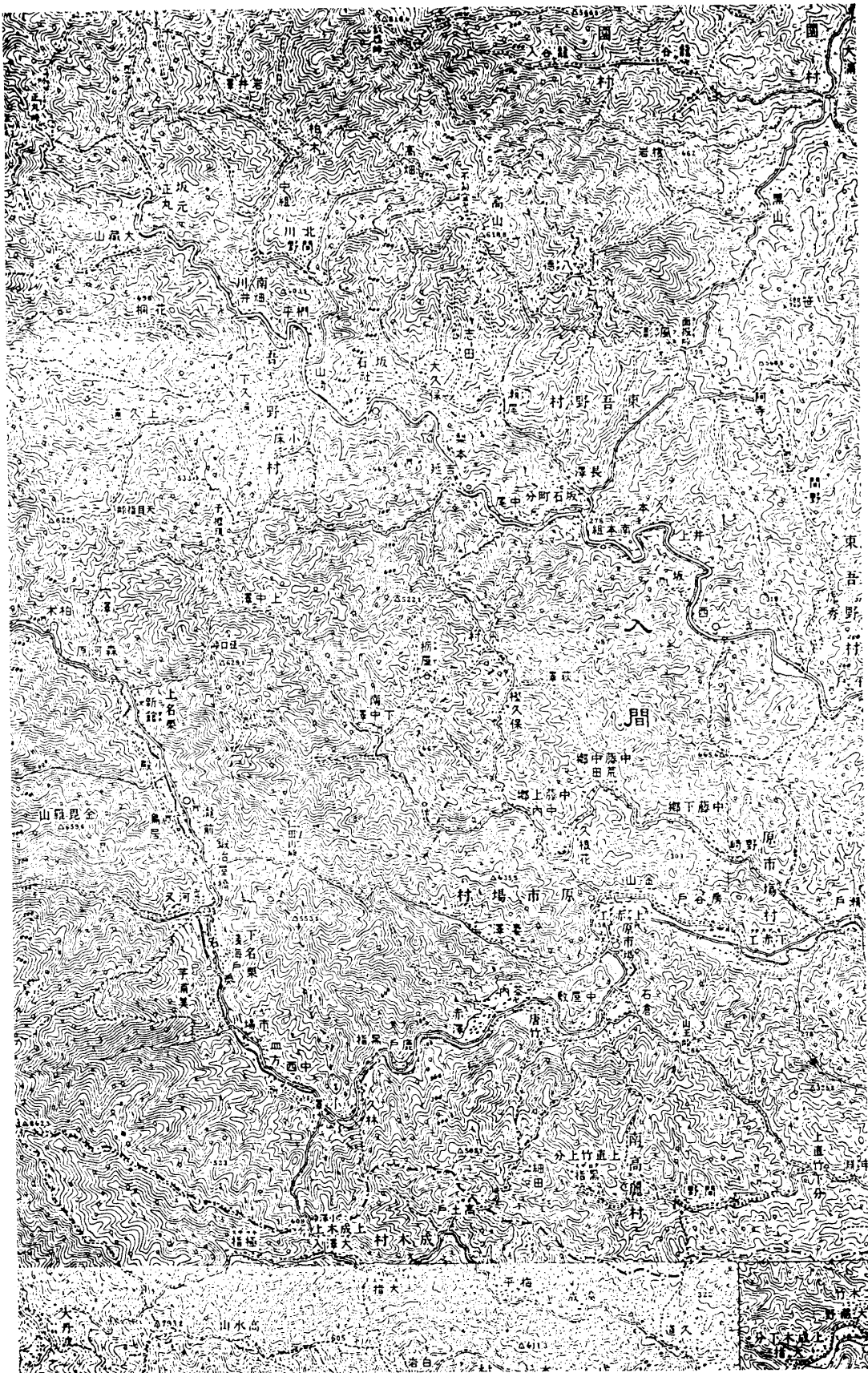


図2 1910~1915年の



飯能町及び付近 <19> P.2 による> (縮尺は図3と同じ)

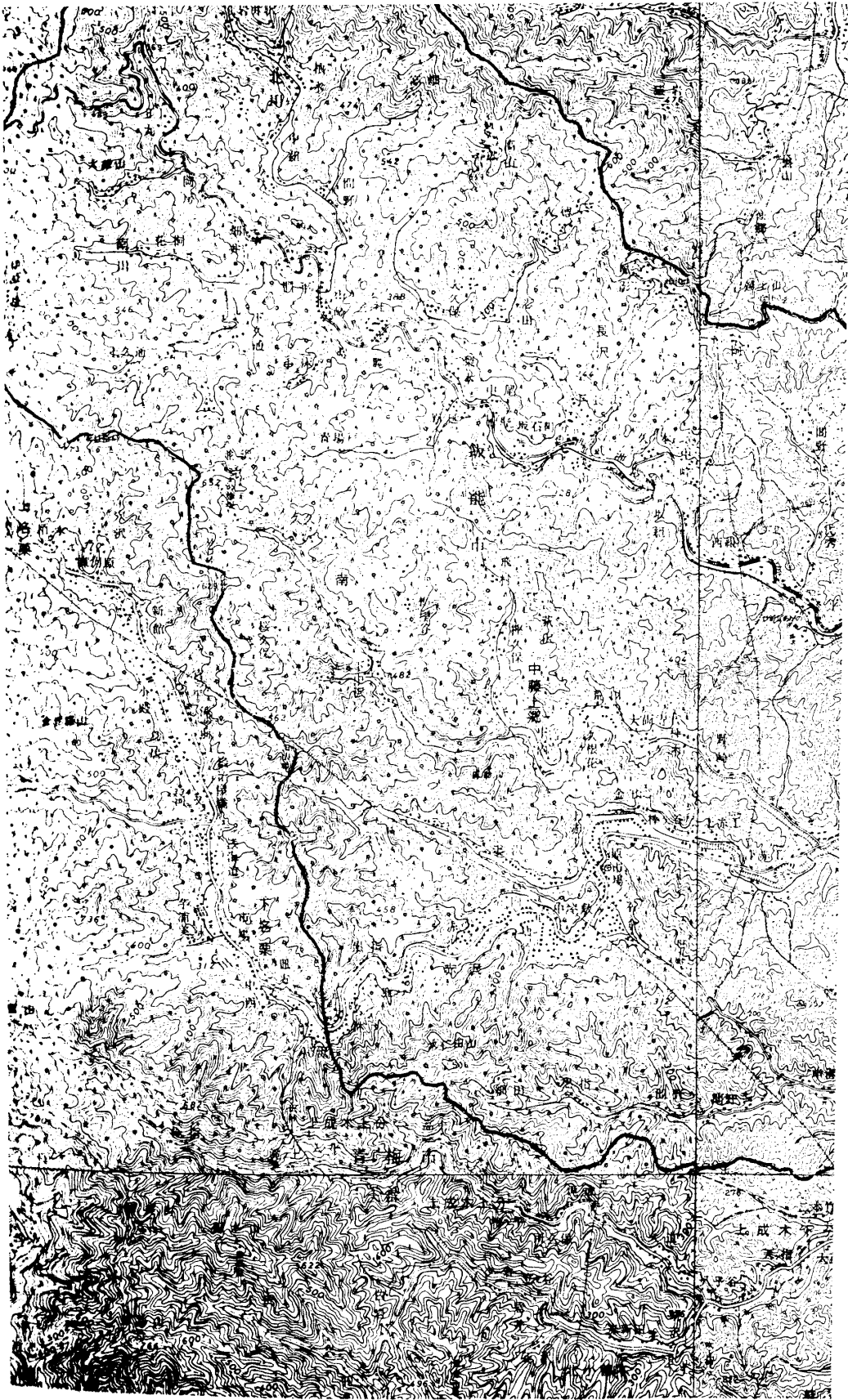


図3 1969～1970年の



飯能市及び付近 <19> P.3 による

一として備らざるなし実に本郡（高麗郡，筆者注）中の小都会なり又外秩父の咽喉に位するを以て往時毎月六の日十の日に市を開き有無を交易す運輸便利薪炭乏し（中略）地味（中略）桑茶に適す水利不便時々旱に苦しむ，税地，田八町三反四畝六歩，畑四十五町八反六畝五歩，山林五十八町三歩九畝十七歩五厘，総計百十二町五反九畝廿八歩五厘（中略）戸数，本籍百五十七戸平民，寄留七戸同上，社九戸村社一座平社一座，寺三戸真言宗一字曹洞宗二字総計百七十六戸，人口，男三百九十七口，女三百九十口，総計七百八十七口外寄留男三十人女廿三人（中略）物産，繭六十七石三斗，米八十六石七斗，大麦四百四石七斗五升，小麦八十五石三斗，大豆八十六石七斗五升，小豆十一石二斗五升，粟四十五石五斗五升，薩摩芋千七百七十四貫，清酒三百十石，焼酎四石二斗，製茶廿四貫二百目，醬油百八十石，生絹五十疋，木綿縞三千百五十反，民業，男は農桑及工商を業とし女は養蚕縫織を業とす²¹⁾」と記されている。

これに対して，久下分村は，1820年ころ，「西南に入間川を控たる地なり，土地平坦とはいえど川によりたるあたりは自ら卑し，陸田のみにて水田はなし（中略）民戸五十（中略）西の方秩父より東の方川越城下へ通ふ道にて，当村にかかると三町許，その間は略幅七間余，南側に民家軒を並べて，北側は飯能村となり，又東真能寺村界を南に折て青梅道あり，これは道幅六七尺なり，毎月六十の日飯能村の市，即ち此村に及ぼせり²²⁾」と書かれている。さらに1876年になると「地勢，平坦西南に入間川を帯ふ運輸便利薪炭乏し，地味（中略）桑茶に適す，税地，畑二十九町八反七畝廿八歩（中略）戸数，本籍七十八戸平民，寄留一戸同上，社四戸平社，総計八十三戸，人口，男百八十三口，女百六十八口，総計三百五十一口外寄留男二人女三人（中略）物産，繭十一石一斗八升，米三十二石二斗五升，大麦二百一石二斗五升，小麦四十六石六斗三升，大豆五十三石四斗七升，小豆十一石六斗三升，粟廿二石一斗五升，蕎麦九石，清酒百三十石，焼酎四石，製茶三十九貫目，生絹十一疋，木綿縞千七十反，民業，男は農桑商及製茶を業とし女は農桑紡績を業とす²³⁾」とされている。

また，1820年ころの真能寺村は，「土地平坦にして，民家五十二，所々に散在す（中略）陸田多く水田少し，農間の稼男は薪を採り繩をなひ，女は青梅縞或は絹紬を織れり，村内にかかる路は西の方秩父より，東の方川越又は江戸へ通へる路と二条あり，又北の方中山村より南の方八王子へ通り路一条あり，何れも道幅二間許なり²⁴⁾」と記されている。さらに1876年には，「地勢，平坦車馬便利薪炭乏し，地味（中略）稲麦に宜し水利不便年々旱に苦しむ，税地，畑二十九町八反七畝廿八歩（中略）戸数，本籍七十一戸平民，寄留一戸同上，寺二戸曹洞宗，総計七十四戸，人口，男百六十七口，女百七十三口，総計三百四十口外寄留男二人女一人（中略）物産，繭十四石，米二十石，岡穂二十四石，大麦百八十石，小麦七十八石，大豆五十二石，粟二十五石，蕎麦十五石，羅蔔一万千四百貫目，里芋二千三百貫目，薩摩芋二千貫目，藍葉百六十貫目木綿縞六千反，製茶五十貫目，土器九十五駄，民業，男は農桑工商を専とし女は農桑を専とす²⁵⁾」とされる。

以上によって、(1)3村共に、江戸（東京）——川越——秩父、八王子——秩父の両ルートに分岐点に当たる交通上の要衝に位置していたこと (2)3村共、畑作中心であるが、特に久下分・真能寺では、その傾向が強かったこと (3)飯能村では、耕地面積をしのぐ山林があり、他の2村の戸口・耕地面積は、共に飯能村のほぼ半ばであったこと (4)1876年の製茶産出高は、真能寺村が最も多く、久下分村・飯能村の順であり、木綿縞の生産高も、真能寺村が他の2村合計のそれをしのいでいたこと、(5)1820～1876年の戸数増加は、久下分村166%、真能寺村142、飯能村129%であって、飯能村の戸数の定着傾向がうかがえること²⁶⁾が指摘できる。本論文では、1882年にこの3村が合併して町制を施行した範囲を中心として、考察する。

3. 商業地域の形成

(1) 概 観

1883～1884年は、庶民が、松方正義による紙幣整理事業の進行に伴う不況のどん底にあえいだ時期である²⁷⁾。したがって、商勢は萎縮し、店舗数や販売額は、庶民の経済生活を支えるための最小限のものであったとみられる。不況期に持続し得た店舗が、いかなる商勢の変化を経て、それ以降、どのように存続し得たかということは、きわめて興味深い問題である。しかし、この時期の集落について、各店舗ごとに業種・種目別の販売額を示す資料を利用して地域的に比較分析

表1 飯能（1884）・越生（1883）における店舗の比較

地域	業種	店舗数・販売額・業態		総 計			部 門					
		a 店舗数	b 販売額	b/a	卸 売 り		仲 買		小 売 り			
					a	b	a	b	a	b		
飯能	日用・食料品商	42(64.9)	63,232(52.9)	1,506	3(7.1)	23,046(36.4)	1(2.4)	668(1.1)	38(90.5)	39,518(62.5)		
	繊維品商	10(15.3)	47,717(39.8)	4,718	2(20.0)	19,768(41.4)	2(20.0)	2,070(4.3)	6(60.0)	25,879(54.3)		
	身辺細貨品商	3(4.6)	289(0.2)	97					3(100.0)	289(100.0)		
	家具類商	5(7.6)	2,443(2.0)	489				⁽¹⁾ 4(80.0)	⁽¹⁾ 498(20.3)	1(20.0)	1,945(79.7)	
	文化品商	5(7.6)	6,169(5.1)	1,234					5(100.0)	6,169(100.0)		
	計	65(100)	119,850(100.0)	1,844	5(7.6)	42,814(35.7)	7(10.8)	3,236(2.7)	53(81.6)	74,762(61.6)		
サービス業	19(100)	4,848(100.0)	255					19(100.0)	4,848(100.0)			
越生	日用・食料品商	37(49.5)	6,637(13.2)	179	6(16.0)	3,961(59.7)			31(84.0)	2,676(40.3)		
	繊維品商	20(26.6)	40,593(81.3)	2,030	4(20.0)	33,623(82.9)	8(40.0)	6,143(15.1)	8(40.0)	827(2.0)		
	身辺細貨品商	1(1.3)	587(1.1)	587					1(100.0)	587(100.0)		
	家具類商	15(20.0)	2,011(4.0)	134	1(6.6)	1,020(50.8)	⁽¹⁾ 12(80.0)	⁽¹⁾ 814(40.4)	2(13.4)	177(8.8)		
	文化品商	2(2.6)	223(0.4)	112					2(100.0)	223(100.0)		
	計	75(100)	50,051(100.0)	1,053	11(14.6)	38,604(77.3)	20(26.6)	6,957(13.8)	44(58.8)	4,490(8.9)		
サービス業	32(100)	62,595 ⁽²⁾ (100.0)	1,956					32(100.0)	62,595(100.0)			

〔注〕 ()内は%,ただし部門欄の()は各業種別数値に対する%。(1)製造販売,(2)旅館の宿賃は、止宿人1人1泊21銭として算出。サービス業を便宜上小売部門に入れた。資料は、1884年：商業売上金高其他調査による(越生については5)から作成)。なお、兼業店舗の業種区分は販売額の最も多い業種とした。

する研究は、従来、行われなかった。本論文の方法論的意義は、ここにあり、以下、詳細に分析したい(表1)。

店舗数をみると、越生107に対して、飯能84である。1876年の人口は、越生539に対して、飯能1,541であるから、飯能の1店当たり人口は、越生をはるかに越える。しかし、当時の両集落の課税面積が、越生約48ha(うち、山林0.3%)、飯能約172ha(うち、山林34%)である²⁸⁾ことからもうかがえるように、これは行政区域の広狭に起因する現象であり、ちなみに総販売額を比較すると、越生112,646円、飯能124,698円であって、両集落の商勢が余り変わらなかったことを示している。

ところがその内容は、きわめて異なる。まず、越生では、サービス業店舗による金額が販売業店舗のそれを越えるほど多かったのに対して、飯能では、前者は後者の4%である。しかも後者の1店当たり販売額をみると、飯能は越生の約1.8倍であるが、前者の場合、飯能は越生のほぼ1/3である。いいかえれば、サービス業店舗主導型の越生に対して、販売業店舗中心の飯能が区別される。

次に、両集落の販売業店舗をみると、店舗数の上では、共に小売商が大半をしめるが、部門別販売額では、越生が卸売り77%・仲買14%・小売り9%であるのに対して、飯能は小売り61%・卸売り36%・仲買3%である。つまり、サービス業店舗主導型の越生では、販売業店舗の主力が卸売りであるのに対して、販売業店舗中心の飯能では、小売りが主体となっている。

卸売商を検討すると、越生では、卸売店舗数の約1/3に当たる繊維品商4店で、卸売商販売額の約98%をしめるのに対して、飯能では、日用・食料品商と繊維品商の2大業種によっている。すなわち、繊維品商一辺倒の越生に対して、調和的な飯能が対蹠的である。

仲買商の場合も、越生では、仲買商数の40%に当たる繊維品商8店で仲買販売額の86%をしめ、残りが家具類商による販売額であるのに対して、飯能では、主体をなす繊維品商が売る64%のほかに、日用・食料品商と家具類商もこれに次ぎ、卸売商と類似する傾向をもつ。しかし、小売店舗数及び販売額は、両集落共、首位が日用・食料品商で繊維品商がこれに次ぐ。

かくて、越生では、繊維品商を始め日用・食料品商や家具類商が卸売り・仲買及び製造販売を主体とし、その他の業種は小売販売額だけであるのに対して、飯能では、上記の業種において卸売り・仲買・製造販売による販売額がみられるものの、すべての業種にわたって、小売商販売額が首位を示す。1876年、畑約35ha・水田約13haの越生は、蚕糸品のほか団扇42万本の生産もあり、特に生絹2,200反の生産²⁹⁾や生絹の取引をもって、知られていた。これに対して、飯能は、畑約106ha・水田約8haを背景にする各種の農産物と醸造・製茶で知られ、農家の副業による木綿織生産は11,200反に達し³⁰⁾、その取引も多かった。しかし、大衆需要を基盤とする木綿織物を生産し取引する飯能は、付加価値の高い生絹の生産・取引に傾斜する越生よりも、商業地域としての特化の傾向が弱かったのである。

(2) 日用・食料品商の展開

飯能においては、日用・食料品商は、販売業店舗数の65%、同販売額の53%をしめ、最も大きなウェイトをもつ。また小売り・卸売り両部門においても、店舗数・販売額共に、6業種中の首位であり、前述のように、越生との差異がきわめて明瞭である。

1884年における日用・食料品商を、種目別に検討しよう(表2)。店舗数の10%以上を示すのは、荒物類商・菓子類商・穀類商・生鮮食品商の4種目である。この4種目は、店舗数の81%、小売店数の66%、小売額～全販売額の75～87%を占める。卸売り：仲買：小売りの店舗類比は、ほぼ7：2：91であるが、販売額比は36：1：63であり、卸売額のほとんどが穀類商である。また、上記4種目の店舗数は、荒物類商・菓子類商・穀類商・生鮮食品商の順に多いが、販売額は穀類商が最も多く(全販売額の67%)、次いで荒物類商・生鮮食品商・菓子類商の順である。穀類商は、卸売商2店で販売額の55%を占め、越生と比べると、卸売りの占めるウェイトが小さく、小売額がきわめて大きいことが注目される。商品として茶を第1に取扱う茶商が、卸売商及び仲買商だけに限られるのは、狭山茶³¹⁾の生産地問屋及び仲買であったことを物語る。

① 荒物類商

1884年における荒物類商の販売額ないし1店当たり販売額は、他の業種あるいは種目を兼業する4店が最も多く、荒物だけ売る5店が次いでおり、陶器だけ売る3店が最も少ない。

兼業の4店舗を検討しよう。O₁の販売額は、1881年、1,876円・185円とだけ記されているが1884年、荒物古着1,448円、1885年、荒物古着962円・糸繭仲買100円、さらに1887年、荒物1,098円・糸繭仲買140円・古着135円、1890年、荒物1,616円・蚊帳280円・糸繭仲買142円・古着75円

表2 飯能の日用・食料品商(1884)

種目	a 店舗数	b 販売額(円)	卸 売 り		仲 買		小 売 り	
			a	b	a	b	a	b
1. 荒物類商	12(28.5)	7,899(12.5)					12	7,899
2. 菓子類商	8(19.1)	1,321(2.1)					8	1,321
3. 穀類商	7(16.6)	42,826(67.7)	2	22,559			5	20,267
4. 生鮮食品商	7(16.6)	2,899(4.6)					7	2,889
5. 酒類商	2(4.8)	5,186(8.2)					2	5,186
6. 茶商	2(4.8)	1,155(1.8)	1	487	1	668		
7. 木炭商	2(4.8)	298(0.5)					2	298
8. 砂糖商	1(2.4)	1,230(1.9)					1	1,230
9. 豆腐商	1(2.4)	428(0.7)					1	428
計	42(100)	63,232(100)	3	23,046	1	668	38	39,518

〔註〕 資料は、1884年：商業売上金高其他調書による。なお、兼業店舗の種目区分は、販売額の最も多い種目とした。

と記載されている。O₂の瀬戸物・水油小売額は、1881年1,050円、1884年1,311円と増加したが、1885年、瀬戸物180円・水油113円、1887年、瀬戸物199円、水油・石油103円、1890年、瀬戸物112円、水油・石油53円と減少している。N₁の荒物乾物小売額は、1881年1,580円、1884年1,121円、1885年907円と低下し、ついに1887年11月には、米麴の委託販売を開始した。しかしその小売額は、1887年、荒物乾物941円に対して米麴8円、1890年も、915円に対して7円に過ぎなかった。K₁にいたっては、1884年に、荒物212円・糸繭62円が小売りされたが、それ以後閉店している。

すなわち、販売額の多いO₁は、古着小売り～糸繭仲買蚊帳小売りという繊維品販売を兼ねることによって、商勢を挽回した。これに対してO₂は、瀬戸物・油の小売りに終始して、1885年以降商勢が弱まり、荒物乾物の小売りを続けたN₁は、米麴の委託販売を兼ねても、商勢を挽回し得ず、販売の少ないKは、糸繭の小売を兼ねるが、休業するにいたった。特に、糸繭仲買や古着小売りの拡大に注目したい。

次に、1884年において荒物だけを守る5店舗をみよう。T₁の小売額は、1881年1,470円、1884年950円、1886年600円と減少し、1887年には、荒物小売額700円のほか、糸繭仲買額256円に達した。しかし、1890年には、糸繭仲買を休業し、荒物701円を売ったに過ぎない。なお、上述の糸繭仲買額のうち、200円は資料において朱字で書かれた追加金額であり、3年後にその仲買が休業となったのであって、糸繭取引の投機性が如実に示され、その投機性が、徴税額に敏感に反映したものとみられる。O₃の小売額も、1884年487円、1885年432円、1887年472円と停滞したあげく、糸繭仲買（販売額350円）をも兼ねるにいたった。この仲買額うちの270円も、朱書による追加金額であり、1890年には、荒物小売額601円に対し、糸繭仲買額が500円に達して、これまた、投機性の著しさを物語る。

O₄は、1881年、荒物・織物計4,820円の小売額をあげたが、1884年には、荒物小売額551円を記載するだけとなり、1890年9月には織物類の廃業届が出され、さらに同年11月には、荒物小売り自体も廃業したため、同年の荒物小売額は513円にとどまっている。K₂の荒物小売額も1884年の1,090円から1885年の855円に減少し、1887年3月には廃業してしまう。O₅の場合、荒物小売額が、1881年423円、1884年111円、1885年39円と減少し、1887年には、荒物販売不振のため、糸繭仲買額（55円）が荒物小売額（35円）を上回った。しかし1890年には、荒物小売額が480円に増加し、糸繭仲買額は63円に減じた。

O₅の商勢挽回の背景には、地域住民のリクリエーションに対する需要を店舗の宣伝に利用する次のような店舗の提供があった。1つは、この年の1月20日の手踊興行の会場としてであり、興行主は茨城県行方郡荒宿村のAであり、木戸銭は大人1銭・子供1銭3厘であった。他は、入間郡宮寺村の興行主Mに対して行った8月26・27両日にわたる見世物（亀甲）会場への提供であった。浮動的な糸繭仲買の性格と、娯楽サービス業展開の萌芽が、看取される。

さらに、1884年において陶器だけ売る3店舗を検討する。Y₁の小売額は、1881年の250円から、不況の1884年に際しても690円を上げたが、1887年4月には織物仲買を兼業し、この年の販売額は、陶器小売額485円に対して、織物仲買額252円となった。ところが1890年には、両者の地位が逆転し、兼業であった織物仲買の販売額(950円)が、陶器小売額(350円)をしのいでいる。H₁の陶器小売額も、1881年の300円から、1884年33円、1885年25円、1887・1890両年31円と激減し、K₃の場合も、1881年62円、1884年32円と減少している。一般的な陶器商の景況不振に対して、織物仲買を兼業したYの商勢伸張が、注目を引く。

② 菓子類商

1884年における菓子類商は、販売額・1店当たり販売額共に、菓子類だけを取扱う6店舗の方が、その他の種目を兼ねる2店舗よりも多い。前者、すなわち、1884年における専門店舗をみよう。1881年315円の小売額を上げた餅商S₁は、1884年に199円に減少し、やがて1887年4月から飲食店を開業するが、1890年には、果物12円・団子4円の小売額を上げたに過ぎない。同じく餅商であったS₂の小売額は、1881年の250円から、1884年120円、1885年63円と減少し、1887年には飲食店に転業するが、同年の売上額125円に対して、1890年80円に減っている。また、1884年に35円の小売額を上げた雑菓子商T₂は、1885年、塩せんべい・団子の小売額85円に増加したものの、木炭・青物小売商に転業する。すなわち、木炭は、1887年50円、1890年60円、青物は、1887年30円、1890年35円の小売額を示している。餅菓子商Y₂は、その小売額を、1881年の573円から1884年の223円に減じたまま、姿を消す。このように、餅商から飲食店への転業は、必ずしも商勢の伸展に結びつかず、雑菓子商から木炭・荒物商への転業が、商勢のわずかな伸張をみせるに過ぎなかったのである。

ところが、1881年に280円の小売額をあげた菓子商S₃は、1884年206円に減り、1885年、塩せんべい94円・糸繭仲買68円、1887年、糸繭仲買170円・荒物133円・塩せんべい65円、1890年、荒物175円・塩せんべい57円・糸繭仲買50円の販売額を示す。1881年に211円の小売額を上げた菓子商O₁も、1884年72円に減少したために、1885年には、古銅鉄売買を本業とし、糸繭仲買を兼業とするにいたった。とはいえ、本業の販売額が7円であったのに対して、兼業のそれが45円となっている。したがって1887年1月、本業(古銅鉄商)を廃業して、糸繭・製茶両仲買額各785円・65円を上げている。さらに1890年3月になると、糸繭仲買・製茶仲買・古道具商の外、すでに廃業したはずの古銅鉄商をも含めて本業とし、これらに対する古着商兼業届が、年間小売見積額20円として、提出されている。しかし、同年の販売額として記載されているのは、糸繭仲買736円・製茶仲買65円・古銅鉄10円・古道具3円であった。これらの菓子商は、糸繭・製茶両仲買やサービス業的な種目を多角的に兼業し、それらによる利潤を流動資本に繰り入れながら、商勢を伸展したものとみられる。

次に、1884年において他の種目を兼ねる菓子類商店舗を、検討する。K₄の小売額は、1881年300円に対して、1884年、菓子270円・砂糖125円、1885年、砂糖114円であったが、1887年以降、水飴小売をも兼ね、同年、砂糖143円・水飴10円、1890年、砂糖111円・水飴11円となった。1881年の荒物小売額240円を上げたK₅も、1884年には、せんべい・わらじ・草履71円を小売りしたが、1885・1887両年共に、荒物46円を売るに過ぎなかった。いいかえれば、菓子商が主力であったK₄、荒物商起源のK₅のいずれも、菓子を一時的に小売りしていたわけで、いわば不況を克服するために、零細ではあるが安定した需要に支えられる菓子小売を、臨時に兼ねていたことを表わす。そして景況が回復すると、K₄のように、菓子商から砂糖商へのルートを指向した点が注目される。

③ 穀類商

1884年における穀類商の販売額及び1店当たり販売額は、穀物だけを取扱う2店舗よりも、他の業種あるいは種目を兼ねる5店舗の方が大きい。前者2店舗を検討しよう。1881年の卸売額3,850円を上げたT₃は、1884年2,866円に減り、1885年には、穀物卸1,440円・糸繭仲買570円・製茶仲買315円・木炭小売り150円と販売品目を広げて商勢を維持するが、1887年には、穀物卸830円・糸繭仲買375円・製茶仲買315円・木炭小売り10円と、ほぼ4割を減じた。しかし、景況が回復した1890年には、糸繭仲買2,635円・穀物卸1,560円・製茶仲買185円となり、木炭小売りを休業して穀物卸を回復させ、営業の焦点を糸繭仲買に移した。一方、穀物小売商K₆は、1881年の小売額3,131円から1884年1,270円、1885年750円、1887年382円に減少し、1890年になっても、穀物小売り342円・糸繭仲買20円という商勢の停滞を続ける。卸売りを母体として糸繭仲買を大幅に導入したT₃の伸展に対して、小売りにとどまりながら糸繭仲買を兼業して、商勢を萎縮したK₆が、対照的である。

1884年における兼業穀物商をみよう。1881年に穀物・糸繭・桑の卸売額17,000円を示したA₁は、1884年、穀物13,539円・繭5,531円・桑603円を卸し、1885年、穀物卸7,775円・同小売り61円・糸繭口銭1,297円・同仲買375円・桑口銭262円、1887年、穀物卸6,975円・繭仲買1,400円・同口銭829円・桑口銭181円・穀物小売り55円と減少を示した。しかし1890年には、穀物卸16,371円・糸繭仲買3,800円・穀物小売り182円・繭口銭58円・桑口銭24円に回復した。

1881年穀物小売額1,600円を示したM₁は、1884年、穀物6,950円・木炭345円、1885年、穀物・木炭5,761円の販売額で小売商を続けたが、1887年以降、卸商に発展し、同年、穀物卸6,685円・同小売785円・木炭卸415円・陸運サービス手数料11円、さらに1890年、穀物卸9,992円・同小売582円・木炭卸426円・陸運サービス手数料15円を上げるにいたった。S₄の穀物・木炭小売額は、1881年の1,851円から、1884年には4,209円に達したものの、1885年になると、穀物小売額1,993円に減少し、1887年7月には糸繭仲買を兼業し始めた。同年の販売額は、穀物卸1,234円・

同小売り472円・糸繭仲買400円・木炭卸350円、1890年のそれは、穀物卸1,450円・同小売り910円・木炭卸385円を示し、同年12月には、木材の販売にも手を伸ばした。

1881年に穀物・生糸・打綿計3,800円の小売額を上げた S_5 は、1884年、穀物3,215円・打綿215円の各小売額を示すが、1885年、穀然仲買を主にするようになり、その仲買額1,360円と打綿小売額50円という減少振りをみせ、やがて1887年、穀物卸3,330円・同小売456円・打綿小売り225円、1890年、穀物卸3,130円・同小売り715円・打綿小売り289円と、商勢を伸張した。

つまり、当初から穀物を始め糸繭ないし桑にいたる蚕糸品の卸商として、多くの販売額を上げていた A_1 に対して、 $M_1 \cdot S_4 \cdot S_5$ は、景況回復後の1887年以降卸商化、すなわち生産地問屋化したのであって、穀物の外、 M_1 は木炭卸をも営んで陸運業を兼ね、 S_4 は木炭卸・糸繭仲買から木材販売にまで経営を拡大し、 S_5 は、小売→仲買→卸という発展の過程で打綿小売を兼ねるといふ多角化を遂げていたのである。しかし、繊維品や木炭を取扱わず、したがって生産地問屋としての機能をもたなかった M_2 の穀物・醤油小売額は、1881年8,500円、1884年4,063円となり、1885年、穀物小売り2,015円、1887年、穀物935円・味そ248円・糶226円の各小売りを営むにとどまり、1890年、糶だけが卸売となるが、それでもその販売額は362円に過ぎず、穀物324円・味そ230円は、依然として小売段階であった。

④ 生鮮食品商

1884年における生鮮食品商は、ほとんどが生鮮食品だけを販売しており、魚商が5店あり、販売額の下位2店が青物商であって、そのうちの1店が飲食業を兼ねたに過ぎない。したがって販売額及び1店当たり販売額は、いずれも、生鮮食品だけを取扱う店舗の方が多し。

魚商 F_1 は、1881年1,875円、1884年1,175円、1885年943円と小売額の減少をみたが、1887年、砂糖商を兼業し、魚905円に加えて砂糖270円を販売して、商勢の維持に努めた。しかし1890年9月には、両者共廃業してしまい、この年の小売額は、魚733円・砂糖693円にとどまった。魚商 I_1 も、1881年の1,500円から1884年の780円へと、小売額をほぼ半減し、1885年には糸繭仲買を兼業したが、その仲買額は112円に過ぎず、魚小売額418円と合わせても、商勢は不振の一途をたどった。ついに1886年12月、魚商を廃業し、1887年には、糸繭仲買や、それまで記されていなかったが営業を継続していたとみられる製茶仲買をも、廃業した。また、1884年に282円の小売額を上げた魚商 Y_3 は、1885年136円に減り、1887年には、115円に減少した魚類小売額と、糸繭仲買額73円をもって商勢を維持し、1890年、魚小売り130円・糸繭仲買180円を商って、商勢を挽回した。

1884年における魚商各店舗販売額の下位2店は、1890年まで、魚以外の商品を販売しなかった店舗である。魚商 O_7 は、1881年250円・1884年191円・1885年138円・1887年151円・1890年255円、魚商 N_2 は、1884年186円・1885年98円・1887年93円・1890年107円の各小売額を示して、経営を持続し、上述のように他の商品をも取扱って販売額の多かった F_1 や I_1 が廃業に迫られた

のと、対蹠的である。すなわち、内陸にあって、地域住民による需要のほぼ安定した商品であったために、小規模ながら、いわば専門店の実績が認められたものとみられる。

青物商のウエイトは、魚商のそれも小さい。在町は、元来、野菜を自給することを立て前とする村落社会を背景として、成立していたからである。青物小売りと飲食業を兼ねる K_7 は、1881年の売上額213円から、1884年、青物小売り116円・飲食業69円、1885年、果物57円と減少した。そこで1886年1月、醤油小売業を兼ねて、同年の小売額は、醤油168円・果物55円となったが、1890年には、果物小売額55円だけとなった。また青物商 K_8 は、1881年83円・1884年90円の小売額を示すが、1885年以降、製茶及び屑糸繭仲買に転じている。しかも製茶仲買額・屑糸繭仲買額は、1885年13円・39円、1887年51円・42円であって、屑糸繭仲買よりも安定的な製茶仲買の比重を高めたのである。

⑤ 酒類・茶・木炭・砂糖・豆腐各商

醤油小売商 T_4 は、1884年、醤油8,725円・水油4円、1884年、醤油3,449円、味そ・塩・水油1,541円、1885年、水油925円と、その販売額が低下したため、1887年11月、米麴の販売をも始め、同年、味そ・塩・種油・水油1,210円、米麴118円、1890年、味そ・塩・水油1,118円、米麴80円の販売額を上げたが、商勢の衰微を示している。酒商 O_8 は、元来、旅館であり、1880年176人・1881年157人・1884年251人・1885年246人の止宿客を数え³²⁾、酒の小売りについては、1881年145円・1884年79円が記載されるだけである。1881年から飲食業を兼ねたが、その売上額は、1884年54円・1885年82円・1887年95円であり、1890年9月に廃業したので同年8月までの売上額は、97円であった。また青物小売商も兼ねており、1881・1884両年各63円、1885年35円、1887年45円、1890年32円の販売額を示していた。つまり、 O_8 は、酒小売りと飲食業を主としながら、旅館経営や青物小売りを兼ねていたわけで、 T_4 が実用品一式の関連商品販売に終始したのと、著しく異なる。

製茶仲買と醤油小売りを兼ねる M_3 の販売額は、1881年936円、1884年668円、1885年、醤油小売り187円・製茶卸71円と急減するが、1887年、製茶仲買317円・醤油小売り277円・酒類小売り13円と、商勢回復の兆をみた。不況を反映する1885年には、製茶よりも醤油の販売額の方が多いが、これは、生活必需品という醤油の商品的性格を表わしている。しかし景気が回復すれば、生産地問屋から生産地仲買へと転換しながら茶の販売を伸張すると共に、1890年11月には、年商35円の見積で飲食店を開業し、その翌月から酒類小売りを再開した。かくて1890年の販売額は、製茶仲買275円・醤油小売り227円・酒類小売り13円となっている。一方、製茶商 K_9 の販売額は、1881年825円、1884年、製茶484円・損料3円、1885年、製茶卸128円、1887年、製茶卸165円・糸繭仲買43円、1890年、木炭小売り70円・製茶仲買30円・糸繭仲買15円と、年を追って、著しく減少した。いいかえれば、投機的な糸繭仲買商にも手を広げた K_9 の場合、1885・1887両年にみら

れるような生産地問屋としての製茶卸中心から、1890年の最寄品販売である木炭小売り中心へ移行したのである。

1881年295円・1884年238円・1885年217円・1887年178円と木炭小売額の減少をみた N_9 は、1887年、糸繭仲買を兼ねるようになり、その仲買額55円を含めて、ようやく商勢の衰微を食い止めた。一方、1881年に荒物・木炭を扱って290円の売上額を上げた O_9 は、1884年、木炭・木材の小売額60円だけに落ち込んだ。そして1885・1887両年、各146人・255人の止宿客を数える安宿を経営³³⁾するかたわら、1887年11月、年商40円の見積で飲食店を開業するが、この年の売上額は95円に及んだ。しかし1890年には、飲食業の売上額はわずかに5円となり、それまで記されていなかったがこの年まで営んでいたものとみられる糸繭仲買を休業し、止宿客603人の宿賃³⁴⁾を、おもな粗収入とした。すなわち、木炭商は糸繭仲買を副業化するが、やがて木炭商自身が、サービス業の副業と化する傾向があったのである。

砂糖小売商 K_{10} は、1881年、菓子820円、1884年、砂糖及び菓子1,230円を販売していたが、1885年以降、菓子の販売に関する記載がない。すなわち、1885・1887両年の砂糖小売額が、各450・306円であり、1887年11月、米麴の委託販売を年商20円の見積で開始するが、同年の販売額は4円である。1890年には、砂糖・米麴の各小売額286円・31円を示したが、同年10月には、富山県富山市梅沢町の士族Mからの婦人菓³⁵⁾の委託販売をも兼ねて、商勢の捉回に努めた。前述³⁶⁾のような菓子商から砂糖商への転換を示すと共に、一般に徒歩通行量の多い菓子店舗立地を、委託販売によって生かしながら、経営を保持していた点に注意したい。

豆腐商 I_2 は、1881年、販売品目として、荒物に次いで豆腐を掲げ、その合計小売額が850円に達していたが、1884年、豆腐300円・荒物128円、1885年、豆腐とこれに次ぐ荒物の合計小売額355円、1887年、豆腐192円・荒物78円、1890年、豆腐244円・荒物56円と、荒物主体から豆腐主体に推移しており、在町における庶民生活の変容を示唆する。

4. 結 語

中心性を端的に示すものとみられる商業活動を指標として、首都圏の都市成長前線帯における在来地域の特質を明らかにするため、1883～1884年の飯能・越生両集落の店舗数・販売額・業態を比較し、次いで、飯能における1884年当時の店舗について、1880～1890年を中心とする商勢の推移を明らかにし、店舗の定着性を分析した。その結果、次のことが判明した。

① 1883～1884年の飯能・越生両集落の販売額は、ほとんど同じであり、商業規模がほぼ等しかったが、店舗数は、飯能の方がやや少なかった。また、サービス業主導型の越生では、販売業店舗の主力が卸売りであるのに対して、販売業店舗中心の飯能では、小売りが中心であった。さ

らに、越生では、繊維品商を始め日用・食料品商や家具類商が卸売り・仲買及び製造販売を主体とし、その他の業種は小売販売額だけであるのに対して、飯能では、それらの業種において卸売り・仲買・製造販売による販売額がみられるものの、すべての業種にわたって、小売商販売額が首位を示す。これらの差異は、大衆需要を基盤とする木綿織物を生産し取引する飯能が、付加価値の高い生絹の生産・取引に傾倒する越生よりも、商業地域としての特化の傾向が弱かったことを表わす。

② この特化傾向の弱さは、日用・食料品商のウェイトが越生よりも大きい点からも、明らかにされる。日用・食料品商においては、荒物類商・菓子類商・穀類商・生鮮食品商の4種目が店舗数の10%以上を占める点、及び穀物卸商が卸売額のほとんどを占める点は、飯能・越生に共通する。しかし飯能では、この4種目の店舗数が上述の順に多く³⁷⁾、その販売額は、穀類商・荒物類商・生鮮食品商・菓子類商の順であり³⁸⁾、小売りのもつウェイトが大きかった。

③ 種目ごとにみると、

(イ) 荒物類商は、糸繭仲買を始めとする兼業によって、特に上層を中心とする商勢の伸張を示す。

(ロ) 菓子類商では、餅商から飲食店への転業は、必ずしも商勢の伸展に結びつかず、雑菓子商から木炭・荒物商への転業が、商勢のわずかな伸張をみせる。一般に定着性は弱いだが、糸繭・製茶両仲買やサービス業的な種目を多角的に兼業し、それらによる利潤を流動資金に繰り入れながら、商勢を伸展したものとみられる。

(ハ) 穀類商では、卸売りが糸繭・製茶両仲買を兼ねたり、景気回復後の卸商化に際して、木炭卸・陸運業・木材卸・打綿小売りを兼ねていた。

(ニ) 生鮮魚品商は、菓子類商と共に、1884年における販売額及び1店当たり販売額において、専業店舗の方が兼業店舗よりも多い。この2種目は、地域住民による副食物及び嗜好品の安定した需要と結びついていたために、いわば専門店の実績が認められていた。

(ホ) 酒類商は、飲食業・青物小売りを兼ねる酒小売商と、醤油・味そ・塩・油・米麴などの実用品小売商に分かれる。実用品としての醤油の小売りは、生産地問屋である製茶卸商の不況時の副業にもなる。一方、生産地問屋としての製茶卸商は、糸繭仲買を兼ねながら、木炭小売りを中心とする最寄品販売に移行した。木炭小売商は、糸繭仲買を副業化するが、やがて木炭小売商自身が、サービス業の副業と化した。菓子類商起源の砂糖小売商は、徒歩交通量の多い菓子店舗立地を、委託販売(米麴・売薬)立地に利用していた。また、荒物主体から豆腐主体に推移する豆腐商の存在は、近代初期の在町における庶民生活の変容を示唆する。

〔註〕

- 1) 田村正夫(1972):産業化地域論,明玄書房,p.218
- 2) 田村正夫(1976):商業地域の形成,文化書房博文社

- 3) 田村正夫 (1977) : 首都圏の都市成長前線帯における商業地域の形成——埼玉県坂戸町「きどそと」を中心に——, 武市春男教授追悼論文集, 城西経済学会誌, 12, 1・2・3合併号, p p.124~154
- 4) 田村正夫 (1977) : 埼玉県における20世紀初頭の織物商分布, 歴史地理学紀要19, p p.239~261
- 5) 田村正夫 (1977) : 首都圏の都市成長前線帯における商業地域の形成——埼玉県越生町の1883~1902年の変容をめぐって——城西大学教養関係紀要 1, 1. p p.17~34
- 6) 5)
- 7) 5) p.17・33
- 8) p.42, (5)
- 9) 8)
- 10) 8)
- 11) 8)
- 12) 1978年3月1日現在
- 13) 東洋経済新報社 (1977) : 地域経済総覧, p. 268・270。なお, 同期間の人口増加率は, 全国4.5% (p.264), 埼玉県15.8%であり, 増加率が飯能市よりも低いのは, 行田市5.0%, 加須市2.9%, 秩父市1.4%, 羽生市・蕨市共に-0.1%である。
- 14) 13)。なお, 同期間の人口増加率は, 全国3.6% (p.264), 埼玉県12.0%であり, 増加率が飯能市よりも低いのは, 上福岡市3.6%, 熊谷市3.5%, 羽生市2.3%, 鳩ヶ谷市2.2%, 秩父市0.4, 蕨市-2.6%である。
- 15) 13) p.383。なお, 埼玉県の水準値は80.8であり, 飯能市は, 熊谷市152.2, 本床市127.3, 東松山市125.2, 与野市125.6, 大宮市117.2, 川越市110.1, 蕨市107.7, 秩父市101.5に次いでいる。
- 16) 中島義一 (1958) : 谷口集落の性格についての一考察, 新地理, 6, 3. p.183
- 17) 16) p.185
- 18) 16) p.196
- 19) 埼玉県教育委員会 (1974) : 埼玉縣市町村誌, 第5巻, p.12・30
- 20) 蘆田伊人編 (1971) : 大日本地誌大系, 新編武蔵風土記稿, 第9巻, p.106
- 21) 埼玉県編 (1953) : 武蔵国郡村誌, 第5巻, p.331・332・334
- 22) 20) p.112・113
- 23) 21) p.329・330
- 24) 20) p.123
- 25) 21) p.327・328
- 26) とはいえ, 越生の115%《5) p.18・20から算出》と比べると, 飯能の方が戸数増加が著しかった。
- 27) 5) p.20
- 28) p.22
- 29) 5) p.18・20
- 30) p.22
- 31) 真能寺を中心とする製茶については, p.22・23。なお, 埼玉県茶業協会 (1973) : 狭山茶業史 p.91には, 「安政6年の開港後3年目の文久2年 (1862) の, 飯能市笠縫の島崎忠太氏の所蔵する『青葉買入帳』によれば, 村内 (笠縫村) から阿須・岩沢・川寺・中神・小谷田等の多くの地方から買入, その総額は220貫30双代金46貫934文に及んでいる。購入範囲は大方は現在の飯能市内になっているが, 中神・小谷田は入間市の根通りで, いわば狭山茶の本場である」と記されている。
- 32) 1884年のY旅館の宿賃は, 1人1泊約21銭とみられる《p.16(2)》ので, これによって計算すると, 1880年約37円・1881年約38円・1884年約53円・1885年約52円となり, 旅館経営による粗収入は, 他の種目と比較して少額である。
- 33) 32) の基準宿賃によって計算すると, 1885年約29円, 1887年約51円の粗収入となるが, 「安泊り客」

あるいは「並旅籠」と記載されているので、これよりも少なかったとみられる。

34) 32) の基準宿賃によって計算すると、宿賃は約127円であった。

35) Mが、1888年8月8日付、内務省3459号をもって、免許を受けた売薬である。

36) p. 28

37) 越生では、生鮮食品商・荒物類商・菓子類商・穀類商の順である《5) p. 22》。

38) 越生では、穀類商・生鮮食品商・荒物類商・菓子類商の順である《37)》。